

ひょうごの遺跡

平成18年
2月16日発行

58号

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL 078(531)7011 FAX 078(531)7014

ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

窯跡から見えてきた 加古川の古墳時代



加古川市 さかもと 坂元遺跡

県下初の埴輪窯跡を発見

はじめに

兵庫県埋蔵文化財調査事務所では、加古川市野口町に所在する坂元遺跡の調査を昨年度に引き続き実施しました。遺跡は、弥生時代中期から鎌倉時代にかけて営まれた複合遺跡です。

今年度の新たな成果は、兵庫県で初めて埴輪窯跡を調査したことです。窯は須恵器を焼くための窯と同じ造りで、赤っぽく土師質に焼いています。

埴輪は形象埴輪が大半で、石見型盾形埴輪と呼ばれている埴輪が多く残っていました。

焼かれた埴輪

石見型盾形埴輪は奈良県の石見遺跡出土の盾形埴輪から名付けられたもので、木製の盾をかたどったものとされています。埴輪祭祀には欠くことのできないものです。兵庫県内でも尼崎市から姫路市までに8例出土していますが、坂元遺跡と同じものはありません。近くでは、明石市魚住町の寺山古墳に出土していますが、坂元遺跡で作られたものではないようです。

加古川市内で埴輪出土古墳は10例あります。しかし、そのいずれにも運ばれていませんので、坂元遺跡周辺の未知の古墳に並べるための製品であつたろうと推定しています。

それ以外に鹿の耳・角、人物埴輪の腕、盾持ちの人物埴輪、馬形埴輪を発見しています。鹿の耳や角はリアルに表現され愛嬌のある製品です。昨年度出土しました、冑あいきょうを被った人物埴輪なども含めて貴重な資料になるものと思われます。

埴輪窯の概要

窯は、段丘面を利用して築かれていました。長さ5.8m、最大幅2.4m、残存する高さ1.1mを測る窯跡です。床面の傾斜は10°前後と緩やかで、煙出し付近だけが60°と急になっています。比較的傾斜が平坦な窯跡です。傾斜が急になっている部分のみ強く被熱していますが、土師質に仕上げるためか全体的には強い火を受けておらず、高熱で焼成したと考えられません。また、床面も1面で何度も使用したとも思われず、比較的短期間の使用であつた窯跡と考えられます。



遺跡出土の埴輪



◀▼ 埴輪出土状況



まとめ

年代は6世紀前半から中葉と考えられ、現在加古川市内でこの時期の埴輪を有する古墳は知られていません。そこで、坂元遺跡周辺にこの埴輪を並べた古墳が埋没しているのではと考えています。

加古川市 神野大林古窯跡

古墳時代の須恵器窯跡

はじめに

奈良・平安時代の窯跡が多く存在する加古川市内で、今回古墳時代後期（6世紀前半～7世紀初頭）の窯跡が見つかりました。

発見した所は、加古川市の神野です。県立加古川病院の移転に伴って、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が平成17年11月から平成18年1月にかけて発掘調査を実施しました。

調査の概要

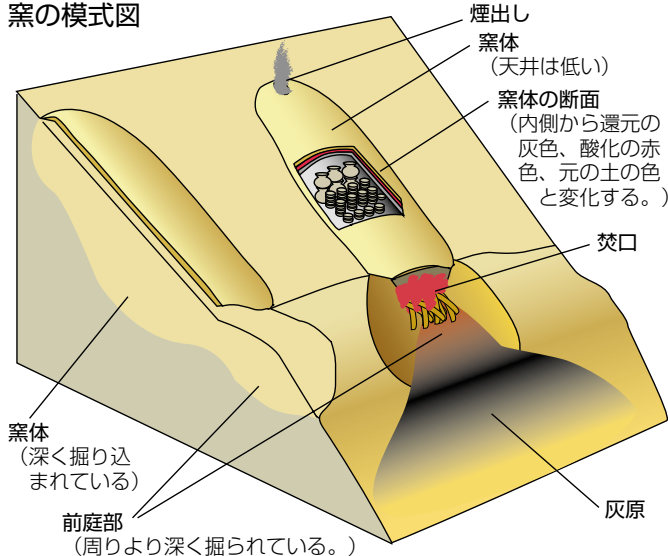
調査は別図のようにA・Bの2地区に分けて行い、A地区で2基（2・3号窯）、B地区で1基（1号窯）の計3基の窯跡を発見しました。

1号窯は最も南に位置し、南向き斜面に築かれています。窯の中央部が張り出す最大幅2.7m、長さ約11mの規模をもち、今回発見されたものの中では最も大きいものです。焚口の下を掘りくぼめて平坦面を造り、作業がし易くなっています。また、窯の南には東西に深い谷が走り、そこに灰原が広がっています。出土遺物には杯身・杯蓋・高杯・甕・壺があり、これらの遺物から年代は6世紀前半代の窯と考えられます。

2号窯は、調査区の最も北側で見つかった西向き斜面に造られた窯跡です。最大幅1.8m、長さ約7mの大きさで、今回発見した窯の中では最も小さいものです。ここでは、焚口付近が少なくとも3回にわたって補修したことが確認されています。年代は、出土の遺物より6世紀後半から7世紀初頭にかけてのものと考えられます。

3号窯は、2号窯跡の南で見つっています。2号窯とは反対の東向き斜面に位置し、最大幅2.2m、長さ約8mの規模を測ります。ここでは、床面は1枚しかありませんが、側壁が部分的に3回以上補修され、補修の際に須恵器の杯を塗り込められているのが見つかりました。

窯の模式図



窯の平面形態は、1号窯と同様に焼成部の中央付近がやや外側に張り出す形をしており、古い形態であることが分かりました。年代は、出土遺物と窯の形態から見て1号窯とほぼ同時期の6世紀前半代と考えています。

まとめ

今回の調査では、6世紀前半の須恵器窯が2基、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器窯が1基の計3基の窯跡が発見できました。窯跡はいずれも残存状態が良く、窯本体のみならず灰原もほぼ完全な形で見つっています。

調査地の周辺では、これまでにこの年代の須恵器窯の調査例がなく、奈良・平安時代の須恵器生産のメッカである東播磨地域において、古墳時代の須恵器生産の始まりを考える上で大変重要な資料となりました。



考古楽倶楽部の遺跡見学



県立考古博物館（仮称） 先行ソフト事業

兵庫県教育委員会では、平成19年秋に開館する県立考古博物館（仮称）で実施する事業を、平成14年度より試行的に展開してきました。

今年度も、様々な事業を行いました。その中で「大中遺跡メッセ」、「夏季先行展」、「山之上遺跡の発掘調査」についてご紹介します。

体験学習交流会 大中遺跡メッセ

学校の先生方や社会教育の関係者などを対象に平成15年度より年1回、体験学習交流会「大中遺跡メッセ（見本市）」を播磨町で開催しています。

毎回2日間にわたって開催しておりますが、今年も8月4日（1日目）にはフォーラムを、翌5日（2日目）にはフェスティバルを行いました。

フォーラム

博物館と学校教育の連携について、理論の講習や実践例の報告をもとに意見交換を行いました。

■理論講習	「博物館と学校教育の発展的連携」	岩田 一彦 氏（兵庫教育大学）
■事例発表1	「〈地域博物館の役割〉小野市立好古館の 地域および学校との連携事業」	大村 敬通 氏（小野市立好古館）
■事例発表2	「学校との連携の試み ～連携授業を中心に～」	近藤 達志 氏（神戸市立博物館）
■事例発表3	「博物館との連携授業の道を探る ー総合的な学習の時間・日本史ー」	水嶋 正稔 氏（兵庫県立御影高等学校）
■事例発表4	「学校と博物館でつくる新しい学習展開」	上月 啓輔 氏（兵庫県立人と自然の博物館）



フォーラム風景

フェスティバル

暑い夏の日、国指定史跡大中遺跡を舞台に、フェスティバルが行われました。初めて晴天となった今年は、古代技術を体験するブースが14出展されました。

参加された方々は、色々なブースで、自ら古代の技術を体験すると共に、出展者とも意見交換を行いました。また、当日大中遺跡にいられた子ども達の飛び入り参加もありました。

今回は、土器作り・石器作り・勾玉作りといった古代体験の定番メニューだけでなく、学校の先生が授業成果を発表した「須磨高校作品展」、宮大工さんが作製した木組みを使って古建築の知恵を体験する「建築パズル」といった新しいブースも加わり、楽しく有意義な一日となりました。



フェスティバル会場



土器をつけてみよう



勾玉をつくろう



建築パズル

須磨高校作品展



土器窯焼き

夏季先行展 自然とともに生きる - 人と環境の考古学 -



会場の様子

県立考古博物館の先行ソフト事業として、2005年7月16日～9月4日にかけて播磨町郷土資料館で先行展を開催しました。今回の展示は、考古博物館のテーマ展示の一つである「自然とともに生きる」をとりあげました。

2万5千年前に降り積もった火山灰、縄文人が使った土器や石器、弥生人たちが生活に使った木の道具、それぞれの時代の人々が食べた木の実や魚の骨。そして各時代の環境をバックした土。これら遺跡より出土したモノからは、当時の人々の暮らしぶりだけでなく、それを支えた環境も知ることができます。今回の展示では、それらを並べ、



未来への問いかけ

そこから何がわかるのかをパネルで解説していきました。小さな種一つや、木の破片から環境を知ることには驚き、古代の人々がいかに自然を利用し共に生きていたのかを知ることができたかと思います。展示の最後には現在のゴミから未来の考古学者への問いかけを行い、今の私たちの生活習慣を考えてみようという試みをしました。1,000年後の考古学者はそのゴミからどんな環境を復元するのでしょうか？



展示会場

考古楽者養成セミナー

山之上遺跡発掘調査

「発掘がしたかったんです！」「土器が出たときは本当に興奮しました！」今年も考古楽者の歓声が発掘現場に響きました。昨年まで考古楽者養成セミナーの講座として行ってきた大中遺跡の発掘調査ですが、今年は隣接する山之上遺跡の調査を行いました。8月後半から～12月までの実に3ヶ月以上、幅2mしかない狭いトレンチ調査にみなさんは真剣に、そして楽しく参加されました。この一夏の貴重な体験は考古博物館という舞台への大きな一歩となりました。



発掘調査



考古楽者への説明



考古博物館(仮称) 先行ソフト事業
平成17年度地域文化財展

みけつくに

あわじ

1月21日(土)から
3月21日(火)まで **開催中**

御食国・淡路 ~古代、天皇が食を求めた国~





洲本メイン会場

発掘された御食国 ～豊饒の国・淡路～

展示会

平成18年1月21日（土）～3月21日（火）

9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日：毎週月曜日、5・11・12月

入館料：大人400円（中学生以下200円）※中学生100円

洲本市立淡路文化史料館

洲本市立淡路文化史料館

考古学講座

淡路と食の考古学

第1回 1月26日（土）13:30～15:00

第2回 2月18日（土）13:30～15:00

第3回 2月25日（土）13:30～15:00

洲本市立淡路文化史料館

古代体験イベント

再現・古代の食事

2月18日（土）10:00～14:00

洲本市立淡路文化史料館

古代の食事を通して、淡路で暮らした人々の生活の様子を知ることができます。

無料

シンポジウム

御食国の考古学

平成18年3月5日（日）

13:00～16:00

洲本市文化体育館

洲本市文化体育館

司会：コーディネーター

司会：コーディネーター

パネラー：淡路市立考古学研究所長、淡路市立考古学研究所員、淡路市立考古学研究所員、淡路市立考古学研究所員、淡路市立考古学研究所員

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

御食国・淡路

古代、天皇が食を求めた国



大漁漁業記念会館

洲本市文化体育館

洲本市立淡路文化史料館

南あわじ市立淡路入影浮彫展示資料館

南あわじ市立淡路展示館

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

淡路市立考古学研究所

編集後記

・今号は、期せずして加古川市の古墳時代窯跡特集となりました。
・例年になく寒い日が続いています。南あわじ市では木戸原遺跡、九蔵遺跡と貴重な発見がありました。現地説明会をお楽しみに。
・また、1月21日から洲本市立淡路文化史料館をメイン会場に、淡路市・南あわじ市の各会場で地域文化財展『御食国・淡路』が始まりました。シンポジウムにも是非ご参加ください。（S.O）